

史跡宇治川太閤堤跡発掘調査の概要

調査地	宇治市宇治乙方地内	名称	史跡宇治川太閤堤跡
発掘理由	史跡整備のための詳細調査(国庫補助)		
発掘期間	平成 29 年 7 月 31 日 ~ (継続中)		
発掘面積	400 m ²	発掘深度	3m
検出遺構	護岸施設 (石出し、石積み護岸) レンガ窯関連遺構	出土品	瓦、陶磁器、古銭

1. 調査に至る経緯と目的

太閤堤とは、文禄・慶長年間(1593～1615年)に豊臣秀吉が淀川と宇治川に作らせた堤の総称です。史跡宇治川太閤堤跡は、宇治川右岸に作られた治水施設の一部を指します。

史跡宇治川太閤堤跡は、平成 19 年度に実施された土地区画整備事業に伴う発掘調査によって新たに発見された遺跡です。平成 21 年 7 月に当時の大規模治水工事の様子を現在に伝えるものとして国の史跡に指定されました。現在宇治市では、この貴重な文化財を広く知ってもらい未来へ残していくために歴史公園の整備に取り組んでいます。

今回の発掘調査では、史跡整備のために平成 21 年度の発掘調査で位置を確認していた 4 基目の石出しの規模や形態などの詳細な記録を作成する目的で実施しました。

2. これまでの調査

史跡宇治川太閤堤跡は平成 19 年から調査が継続的に行われており、これまでの調査によって全長 400m 以上にわたって護岸施設が良好に残っていることが確認されました。

また、護岸施設には川の流れをコントロールするための水制施設が付属しており、石出しと杭出しの 2 種類が確認されています。石出しは川に向かって舌状に張り出す形状をしています。これまでに石出しは 4 基確認し、杭出しは 3 基確認しています。

また、太閤堤跡が作られた当初、使用していた石材は粘板岩だけということもこれまでの調査でわかっています。



<発掘調査の位置>

3. 調査成果

石出し 調査区のほぼ中央で、宇治川へ向かって舌状に張り出し、調査区外に続いています。石出しは下半部の土台となる礫(捨石)と上半部の石を石垣状に積んだ(石垣部)構造をしています。

石出しは、洪水や現代の擁壁などによって上部が壊されていますが、天端の一部が残っており、川床から石出し天端までの高さは約 3m あることがわかっています。天端には 50 cm ほどの粘板岩で亀の甲羅のように丸く覆い、内部に礫を詰めています。また、現在確認できている石出しの長さは 10m ですが、調査区外にまだ続いており、復元すると 13m ほどの長さになると考えています。石出しの幅は川岸との接続部分で 8m あります。

捨石は拳大から人頭大の粘板岩を使用して、平面は石垣部分より一回り大きく作られています。

上部が壊されていることから石出しの内部を観察することができ、石出しは川岸を掘り込んで作られており、石出しの下半部である捨石も川岸際まで続く構造をしています。

捨石は、川岸の斜面の裾にも置かれており、川床から 1.5m ほどの高さまで拳大から人頭大の粘板岩の角礫を置いています。

石列 石出しを中心に上流側、下流側どちらからも石列を検出し、調査区外まで続いています。石列は捨石の上に設置され、途中で屈曲しています。石列は、川岸の斜面を保護する機能を持っていると考えています。

上流側石列は、6.1m の長さで幅約 0.5m になります。配置状況から 3 つの部分に分けることができます。直線的に設置している部分と川に向かって斜めになっている部分、石出しに一番近く円弧を描きながら川に向けて前に一段出ている部分です。上流側の石列が斜めになっている部分から直径 5 cm ほどの木杭を 2 本検出しています。石の下から検出したことや、石列の屈曲に沿うように設置されていることから、石列を作る時の基準杭だったのではないかと考えています。

下流側の石列は、3.2m の長さで幅(天端)が 1.1m になります。上流側とは異なり、石列は円礫がつめられ天端が確認できます。

石列は太閤堤築造当初に作られたのではなく、後世に作られた可能性が高いと考えています。それは、下流側、上流側ともに石列は粘板岩だけではなく、川原石を多く使用しているからです。また、石列が後世の作り直しの場合、石列で使用している粘板岩は石出し本体が水流などの影響によって崩れた石材を利用しているという可能性が考えられます。

4. 調査のまとめ

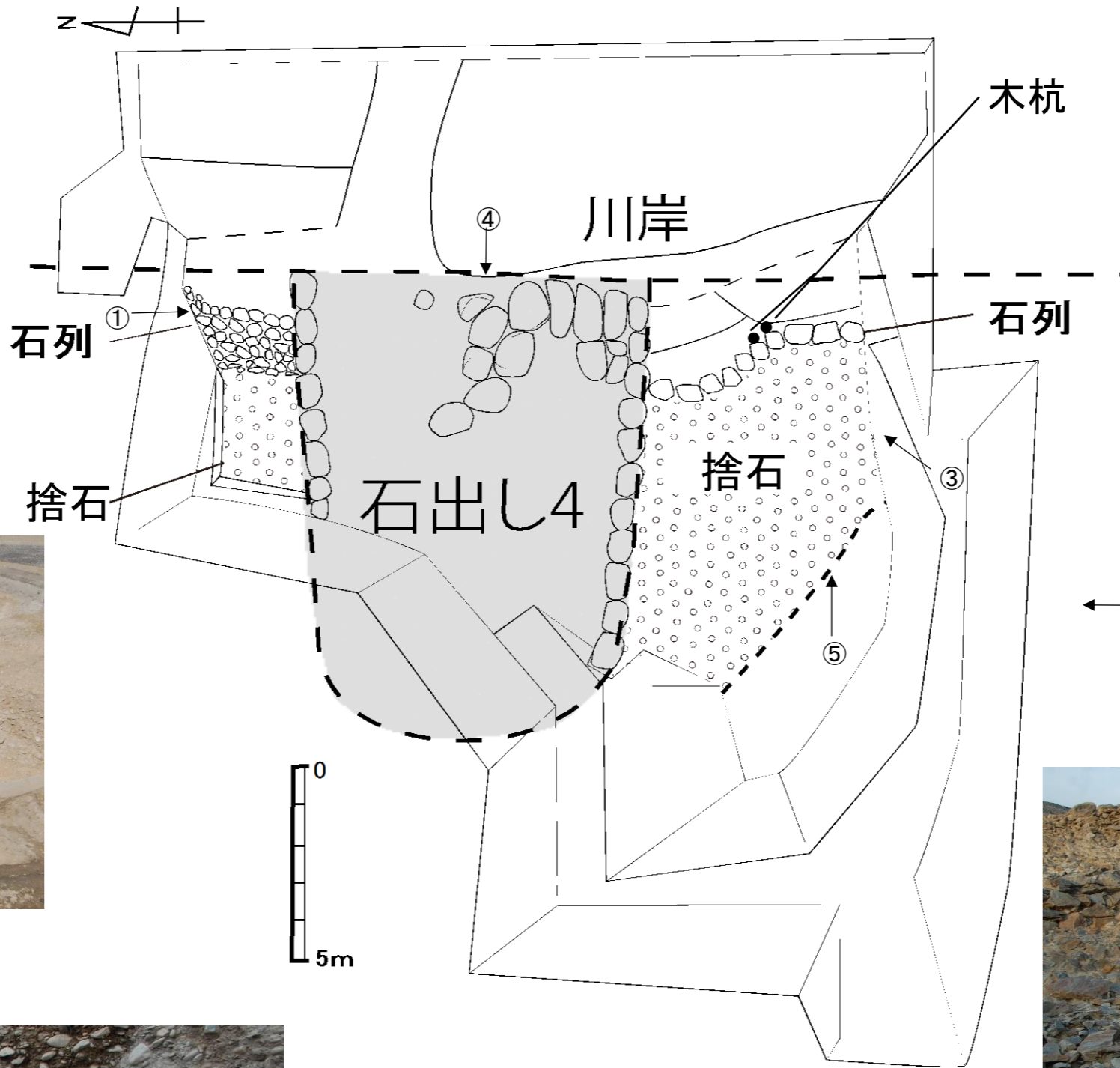
今回の調査をこれまでの調査成果と比較すると以下の 2 点のことが指摘できます。

□これまでの調査で確認した川床の高さは標高 12.3～12.2m で、上流から下流にかけて大きな変化はありません。しかし、川岸の高さは下流の石出し 1 付近で 14.3m でしたが、今回調査した上流部は標高 17m 以上であったと考えられ、3m 近く高くなっていることがわかりました。この高低差に合わせて、石出しの高さも下流側の石出し 1 が 2.2m と低く、上流側の石出し 4 が 3m と高つくられています。

□今回検出した石出しは今まで確認した中で一番宇治川に出っ張っている構造になっています。復元すると石出し 1 は 8.5m、石出し 2 は 7.5m、石出し 3 は 9m になり、石出し 4 は 13m の長さになります。石出し 1～4 は平面が舌状の形状で、側面が石垣のように積まれる構造が同じことから、長さの違いはありますが、同時期に作られたものと考えられます。



①下流側石出しと石列



④石出し天端



②調査区全体(上流側)



⑤捨石(上流側)



③作業風景(上流側)

石出し4調査平面図